『戦国期宗教勢力史論』

安藤　弥　著

目次／序論／第Ⅰ部　戦国期本願寺教団の儀式・組織　第一章　本願寺「報恩講」の始源―親鸞～覚如期・親鸞三十三回忌／第二章　本願寺「報恩講」の確立―蓮如～実如期・「教団」形成との関係性／第三章　本願寺「報恩講」の展開―証如期・「教団」構造との関係性／第四章　親鸞三百回忌の歴史的意義（一）―顕如期・「報恩講」の変容／第五章　親鸞三百回忌の歴史的意義（二）―「御遠忌」のはじまり／第六章　戦国末・近世初期の本願寺「報恩講」／第七章　大坂本願寺の御堂衆をめぐって／第八章　大坂本願寺における「斎」行事／補論1　『顕誓領解之訴状』考／補論2　「権化の清流」は「霊場」へ―『反古裏書』に読む戦国期真宗僧の論理／補論3　戦国期真宗僧の歴史認識―『山科御坊事幷其時代事』から『本願寺作法之次第』へ
第Ⅱ部　戦国期本願寺教団の社会的位置　第一章　中世の本願寺造営史―大谷・山科・大坂・天満／第二章　戦国期本願寺「教団」の形成／第三章　本願寺証如『天文日記』について／第四章　戦国期の大坂本願寺教団と比叡山延暦寺―『天文日記』の検討を中心に／補論1　本願寺顕如の誕生・継職／第五章　本願寺「門跡成」ノート／補論2　本願寺の脇門跡興正寺顕尊について／第六章　京都東山大仏千僧会と一向宗―戦国期宗教勢力の帰結／補論3　「一向宗（衆）」について／第七章　本願寺教如の生涯と歴史的論点／第八章　本願寺教如の宗教活動と社会的位置／本書の総括と今後の課題／初出一覧／あとがき／索引

親鸞七百五十回御遠忌の翌年、本書の著者である安藤弥氏の大部な論考を読む機会があった。それまで一読者として、氏の研究業績にふれてはいたが、戦国期真宗は鑑賞対象の域を出ていなかったので、とにかく氏の論考を読むための勉強をしなければならず、氏の著述を求め、特に当時非公開であった氏の博士論文を閲覧するため国会図書館に通った。ここで氏の研究と、氏が学んでいる多くの先行研究に、集中して学ぶ機会があったことは貴重であった。その時の論考と博士論文がともに本書に増補改訂されて収められている。当時の氏が残された問題や数々の伏線は、その後どうなったのであろうか。再び一読者として本書に学びたい、学べるように学んでいきたい、という思いである。

本書の概要は目次がそのまま語っているが、戦国時代と総称される日本社会において、本願寺教団は教えと作法を持ち、何を行ってきたのか。著者は、浄土真宗のなかの本願寺教団について、時にそのはじまりに立ち戻りながら、東西分派に至るまでの戦国期本願寺を「戦国期宗教勢力」と位置付け、その行動と思想、歴史的実態を明らかにする。

その一端をうかがうと、「報恩講」とは何か。いつ、どこで、誰が、何のためにはじめたのか。ここで、著者が一貫して強調するのは、報恩講は親鸞滅後に近い時代からあったのではなく、その後の展開において歴史的に生成されたものであり、現代、イメージされている報恩講は親鸞三百回忌が最初であり、これが「御遠忌」の最初でもあったことである。そこから当時の本願寺教団とその背景について検討し、「報恩講」「御遠忌」の成立と展開を明らかにする。その報恩講という儀式の実体を明らかにするための基礎史料を検討し、その上で儀式執行状況から教団の内部構造及び教団の社会的地位を検討し、儀式を通して教団の諸問題を浮かび上がらせるという方法を用いる。この儀式の変遷は、著者が担当した『大系真宗史料　文書記録編13　儀式・故実』「解説」（法藏館、二〇一七年）を更に進めたものである。では東本願寺のみが伝える「坂東曲」とは何か？著者は今回も「史料の確認から必要な研究段階」（一七五頁）という。歴史とは分からないことばかりだ。

著者は、現在同朋大学教授であり、同朋大学仏教文化研究所所長を勤め、多忙を極める。本書は待望されて久しく、満を持して刊行された。「十七年にわたる研究成果（ただし筆者の研究全体の三分の一ほど）」（六一五頁）というが、その間、親鸞御遠忌直前に発災した東日本大震災があり、『親鸞展』『真宗本廟（東本願寺）造営史』など記念事業について、被災を免れた氏への負担と期待が増大したことは想像に難くない。初期の構想から質量ともに変わったものになったことがうかがえ、まさに逆縁の一冊である。巻末に付された、「研究者名」を含む詳細な索引が、浄土真宗八五〇年の歴史への道標となることに疑いはない。

（御手洗隆明）

（法藏館、二〇一九年三月、本体一二〇〇〇円＋税）

『近世仏教の教説と教化』

芹口真結子 著

宗教団体の根幹は、もちろん「教え」である。教えを正しく了解しようとする営みは、教団の根本的な活動である。しかし、教えの言葉に対する解釈は、時代の変遷とともに変わることを免れ得ない。だからこそ大切にしなければならないのは、教えに対する学びの変遷の歴史、すなわち教学史の研究である。歴史的に存在する教団は、この教学史と不可分である。もちろん大谷派においても、その真摯な研究は行われてきた。とはいえ、現代における「特に大谷派の中では教学史というものは十分にはありません」（三木彰円「『教行信証』研究をめぐる諸課題」『近現代『教行信証』研究検証プロジェクト研究紀要』第二号、親鸞仏教センター、二〇一九年、三頁）との指摘は、教団に身を置くものがみな重く受け止めねばならないことであろう。

そのなかで、驚嘆すべき研究が上梓された。それが本書『近世仏教の教説と教化』である。本書は、近世後期の大谷派（東派）の香月院深励を代表とする高倉学寮を中心に、全国で起こる教学論争を通して教団の教学統制のあり方や幕藩権力との関係、あるいは民衆の意識、または講録の流通などを、当時の史料を博捜し具体的に論じていく。そうして近世宗教の置かれた社会的状況が非常にリアルに描き出されているのである。豊富な史料に基づく著者の筆致に、読者はまるでその場に居合わせているかのような緊張感をもって、立場を異にする当時のさまざまな人々の声を聴くことになるだろう。まさに、教学史に対する意識を一変させる研究である。

何より驚くべきことは、本書が大谷派教団の外部から提出されたことである。著者の芹口自身のあとがきによれば、本書は一橋大学社会学研究科に提出された博士論文をまとめたものである。「真宗優勢地域ではない関東地方の、それも寺院出身ではない」著者が、このテーマに取り組むきっかけは、近世の史料調査に赴くなかで、「亀洲」（深励の号）という人物が登場することに興味をもったためだという。とはいえ、全国各地に散在する史料を渉猟し、かつそれらを読解するだけでも大変である

が、何よりも教学論争については教学的知識もなければならず、これだけの研究を成し遂げたその苦労が偲ばれる。

著者は終章において今後の課題を四点にまとめている。その一つは、議論が深励の時代の学寮を中心にされている点である。近世と一口に言っても前期や中期、あるいは幕末期など深励の前後の時代、または深励の時代でも学寮以外の御堂衆などの活動もある。著者の視点から、それら時代や立場を異にする僧侶たちの教化と、それがどのように受容されていったのかという実態を幅広く検討し、対比的に検証していくことにより、近世における仏教と社会とのかかわりがより深く描き出されるであろう。これからのさらなる研究が待望される。

近世に対し教学的面から一番に思い浮かぶのは、膨大に積み上げられた聖教への訓詁注釈であろう。それを目の前にして、いきいきとした宗教心が感じられにくかったかもしれない。または幕藩体制という現代とは全く異なる社会状況があり、それに規定された近世教学は現代と縁遠いものに思われてきたかもしれない。例えば本書（一四八頁）でも、他国僧の法談の禁止の法令が寺社奉行からたびたび出されていたと指摘される。現代的感覚からすれば、そもそもなぜそんなことが問題視されているのか自体が理解しにくい。けれどもひるがえって考えるなら、そのたびたびの禁制は、それだけ法談が盛んに行われていたことの裏返しではないか。あるいは、異安心事件というものが頻発する。それは、そのこと自体が教えの真実義を模索せんとする人々の欲求の現れとも言えよう。近世という現代と異なる状況下にあって、そうした教えを求めてきた人々の思いに、これまで十分に耳を傾けようとしてきただろうか。本書を通読し、多くの課題が喚起された。

本書が提起する課題は、実のところ大谷派教学史の課題である。本書の登場によって、それらの課題がいよいよ明示されたとも言えよう。その意味で、本書はまさに大谷派教学を考えるうえで避けることのできない必読書なのである。このような成果を世に送り出してくれた著者芹口に感謝の念を捧げたい。

（藤原　智）

（法藏館、二〇一九年六月、本体三五〇〇円＋税）